

2008.7/12,13

第16回日本ホスピス・在宅ケア研究会 全国大会in千葉 於：幕張メッセ

千葉大会 歓迎の辞

皆さん、こんにちは。全国から千葉へいらしていただいて本当に嬉しく思っています。前々から、今日この千葉で全国大会があるということで、私も楽しみにしてきました。昨年の高山大会の抄録も丁寧に読ませていただいて、私の知らない世界、特に、スピリチュアリティーの問題がたくさん広く書かれて、しかもとっても内容が豊かであったことに驚きました。そして、そういうことの重要性というのをつくづく感じました。

エベレストの下の方にヒマラヤの山麓にネパールという国がありますが、もう30年ぐらい前、私も若くて元気で、そこへトレッキングに行きました。ナムチェバザールという、高度でいうと4000メートルぐらいのところの村ですが、その村のちょっと下のところに大きな菩提樹の木があって、そこに、マニ車というものがありました。この中には経文が入っていて、お経を読む代わりにこの車を回すのだそうです。そのときは、おばあさんが木の下で車を回していました。そうしたら、私と一緒にいたネパールの人が、「ああ、このおばあさんはもうじき死ぬんだよ。だから、仏様のところに行くための準備で、ああやっつと木の下でお祈りをしている。多分帰るときはあの木の下には誰もいないから」と言うのです。私は、えっ？と思ったのですが、2週間ぐらい経ってそこに行ったら、案の定、そこにおばあさんはいませんでした。

千葉県知事 堂本 暁子



もう一つ同じような話があります。やはりヒマラヤの奥地になるのですがカイラス山という山があります。それは日本語で言えば神山、仏教で言えば仏そのもの、ヒンズー教で言えばそれがシバ神と言われている山なのです。そこに洋服が山のように積まれているところがありました。ここは自分の寿命を終えるために遠くからやってきて、仏様の周りを回りながらここで倒れて寿命が終わる。だから洋服だけがたくさん残っている。というふうに説明を受けました。私たち日本人の感覚ではとても信じられないことですが、どちらもとても印象に残っています。ネパールのおばあさんは、本当に枯れるように、だけど、心は多分平和だと思います。お祈りをしながら仏様にお経を唱えながら、木の下で自分の寿命を終えていくという気持ち、そして静かに死んでいく。本当に帰るような死だった。そして、そのカイラス山のまわ

りを回っている人たち、その人たちはずいぶん積極的な死に方なのだと思います。

そのような死に方が私たちに出来るのかというと、もう出来ません。日本でもおそらく、200年前300年前、あるいは500年前、どういう形で人が死を迎えたかということ、同じような死に方だっただろうと思います。

自分の死を考えたときに、私は果たして、枯れるような死を願うことが出来るだろうか。あるいは積極的な自らの死を、祈りの場に自分の身体をもって行って、そこで死ぬような死に方が出来るだ

ろうか、おそらく許されないだろうと思います。

例えば、今日でも明日でも、あるいは、1年後でも10年後でも、どこかでパタッと倒れて、そしたらおそらく救急車が来て、病院に入院させられて、そこから先は、意識があるかないか、あるいは自分の言語が確かかどうかというようなときに、果たして自分の意思で、そういう枯れるようなあるいは積極的な死が選べるだろうか。たぶんとても難しいのだろうと思いますね。

たまたま、私の祖母が97歳で亡くなるのですが、ある時、話している最中に具合が悪くなって倒れました。一人のお医者さんから、救急車ですぐ入院してくださいと言われました。もう一人、親しくしていたお医者さんに相談したら、もういいだろうと、明日の朝まで持たないかもしれないという人を病院に連れてこなくても、と言われました。

それから1週間、彼女は生きていました。その間、親しくしていたお医者さんが、自宅に往診に来てくださいました。結局いろんな人が会いに来て、自分の兄弟やいろんな人に来て、子どもだの孫だのみんなに囲まれて、ふと、こう言ったんですね。「ああ、いっぱいお花が見えているわ」って。私の母に、「コンパクト取ってきてちょうだい。みんなで一緒に花畑に行きましょう。おしゃれしくちやいけない。」と言うので、コンパクトを取りに行き行って戻ってきて、「おばあちゃま、コンパクト持ってきたわよ」って言ったときには、こと切れていました。気がつかないぐらいの間にスーッとこと切れて逝ってしまいました

た。私はその時、本当に病院に連れて行かなくてよかったなと思いました。それは、ドクターともう大激論だったんですね。それで、そういう結果になった。

私は、もう一つ自分の祖母が羨ましかったのは、そういうふうにも子どもや孫が見守ってくれたこと。私は子どもがいまいませんから、そういう形で私を守ってくれる人がいない。とすれば、自分が元気であるうちにどういう死を選べるのかということです。私に限らず、今現代人は多くの方が死を意識していない。何故ならば、昭和20年は平均寿命が、戦争があったせいかもしれませんが、50歳なんです。それで、死亡の原因も結核と胃腸炎なんです。

それから今、医学が素晴らしく進み、どれだけの痛みが、どれだけの病気が近代医学のおかげで治していただけていることか。従って、より長い寿命を得、その中で、自らの人生を充実し、そして家族を、あるいは回りの友達と、豊かな人の生をより長く生きる



ことができる。しかし、終末期、特に一度治ってからまたその最期までの間の終末期という時期にかけてはどうすべきなのかということと、もう一つは生まれてくる生まれ方、おそらくこの一番最初と最後の時期については、今とても難しくなってきたのではないかという気がしてなりません。

今日は、ホスピスの話ですから、最後のところだけを考えますと、いざ終末期になった時、医学はこれだけ進歩しましたが、私たちは人としてレベルの高い、精神的にも文化的にも、あらゆる意味で本当に高度なもの、私たちが生を営める、子どもだけではなくて、孫だけではなくて、ひ孫まで会えるようなそういう人生を歩める、その豊かさの最後の部分について、そしてそれをどう自分たちが受け止めるかということについての研究なり考え方が徹底しているかということ、残念な

がらかなり遅れていると思います。だから、今日ここにお集まりの皆さまは、そういったことを最先端で行ってくださっている方達、どうあるべきかを考えてくださっている方達、私は皆様を本当に大事な存在だというふうに思っています。

日本は世界一長寿の国になりました。長寿の先に訪れる死は、枯れたような死でもなければ積極的な死でもない。であれば、どういった平安な、痛みの少ない、心豊かな安らかな死を迎えることが出来るのか、ということについても、私たちは、深い知恵と、いろいろな経験と、そして技術的なことを学ばなければならないでしょう。多分とても大事なことは、昨年の高山大会でも、散々議論されましたスピリチュアリティ、つまり、動物と一番違うところ、心の問題だろうというふうに思います。

例えば、昔は病院なんてなかった。

